

[学術資料]

自我体験尺度の項目得点と
自由記述内容による自我体験判定の対応の検討

The Correspondence Between Item Scores on the Ego-Experience Scale and the Judgment of
Statements of Whether Participants Had an Ego-Experience

天 谷 祐 子

Yuko AMAYA

Studies in Humanities and Cultures

No. 16

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 16号
2011年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
DECEMBER 2011

[学術資料]

自我体験尺度の項目得点と 自由記述内容による自我体験判定の対応の検討

The Correspondence Between Item Scores on the Ego-Experience Scale and the Judgment of Statements of Whether Participants Had an Ego-Experience

天谷 祐子
Yuko Amaya

要旨 本研究は、質問紙調査において自由記述による自我体験の経験の有無の判定結果が、15項目から成る自我体験尺度における項目別の得点に正しく反映されているのかどうかについて、項目別の統計的解析を行うことにより検討したものである。自我体験尺度における項目ごとの「あいまい群」（自由記述において自我体験を経験したと判定するには不十分な群）と「体験群」（自由記述において自我体験を経験したと判定された群）間の得点について t 検定により検討した結果、2項目を除いた13項目においてはすべて「体験群」の方が高かった。これにより、自我体験尺度の総合得点のみならず、各項目レベルにおいても、自由記述による自我体験の判定結果と項目得点の高さがほぼ対応していることが示された。また「体験群」のみに関して、各項目得点の高さについて1要因分散分析を行うことにより検討した結果、項目3（「自分は何だろう」）が最も高く、項目12が最も低い項目であることが見出された。項目3が、他の項目に比べ、自我体験を経験した人が最も高い得点であり、かつ「あいまい群」との得点差も一番大きいことから、項目3が自我体験を経験したことを検出するために最も貢献している項目であることが示された。

キーワード：自我体験、妥当性、自我体験尺度

<目的>

「私はなぜ私なのか」－自我体験－の報告を質問紙法により検討する場合、まずは自我体験尺度15項目（天谷，2005）への評定を調査対象者に求め、その後評定の高かった項目が1項目でも存在している場合は、続いて設定されている自由記述欄にその評定の高さにかかわる自身の体験を記入してもらう形式が取られている。そのような形式により得られたデータについて、自由記

述内容が「自我体験とみなすことができる」と研究者や分類担当者が判定した場合に、その調査対象者を「自我体験体験群（以後「体験群」と表記）」に分類するプロセスを経る。自由記述内容が自我体験と判定するには不十分であると研究者や分類担当者が判定した場合には「自我体験あいまい群（以後「あいまい群」と表記）」に分類する。またこの2群以外に、自由記述の見られない調査対象者のうち、自我体験尺度における全ての項目について低い評定をつけた者を「未体験群」に分類する。そして自由記述の見られない調査対象者のうち、自我体験尺度における項目の中で高い評定が見られる項目については、分析から外している。さらに、自由記述の見られた調査対象者のうち、自我体験とは異なる体験を報告している者については「誤解群」に分類している。

このように、すべての調査対象者について自我体験の経験の有無を判定する場合、自我体験尺度の得点ではなく、自由記述内容の質的分析の結果が中心となる。天谷（2011b）では、自我体験尺度の総合得点（15項目の合計得点）について、自由記述内容の質的分析の結果との対応を1要因分散分析を行うことにより検討している。その結果、すべての調査において「体験群」と「未体験群」間の自我体験尺度総合得点には有意差が見られ、多くの調査においては「体験群」と「あいまい群」間の自我体験尺度総合得点には有意差が見られている。以上から、自由記述内容の質的分析の結果により、自我体験尺度総合得点のみを使用して、他変数との関連を調べることは妥当であると主張されている（天谷，2011b）。

しかし、自我体験尺度の各項目得点レベルで、自由記述内容による分類と対応しているかという検討は行われていない。自由記述によって分類された「体験群」と「あいまい群」の得点が項目によって逆転している場合（「あいまい群」の方が「体験群」よりも高い場合）や、「体験群」と「あいまい群」の両者を区別できない場合も考えられる。その場合、自我体験尺度からその項目を外すことが妥当であると考えられる。

そこで、自我体験の自由記述による判定において「体験群」とされた人が、自我体験尺度における各項目レベルから「あいまい群」とされた人との差別化を適切に行っているのかについて、項目別の2群間の相違を明らかにすることを本研究の第1の目的とする。これにより、自我体験尺度における各質問項目の項目数や構成を再検討する。

また、自由記述による自我体験の経験の有無に関する分類に、自我体験尺度のどの項目が一番貢献しているのか、または貢献していないのかを明らかにすることは非常に重要である。自由記述による判定において「体験群」とされた人が、自我体験尺度におけるどの項目に最も刺激を受けて、自我体験に関わる内容を想起し、自由記述を記入したかを知ることが、自我体験の報告される様相を明らかにする上で重要な手がかりとなる。一方で、自我体験尺度の中で自由記述による分類に最も貢献していない項目について明らかにすることは、自我体験尺度の項目の構造を再検討する必要性を示すことができる。

以上のような問題意識により、「体験群」において、自我体験尺度内のどの項目が、自我体験の報告を検出するのに貢献しているのか、そしてどの項目が自我体験の報告を検出するのに貢献していないのかを本研究における第2の目的とする。これにより、今後自我体験尺度における各項目の表現の改変や項目そのものの追加または削除の必要性を検討する。

<方法>

1. 分析対象者：天谷・Amaya（2008, 2009, 2009a, 2009b, 2010a, 2010b）による自我体験に関する6回の質問紙調査全対象者1235名（男性533名、女性651名、不明51名、平均年齢19.46歳、 $SD=1.38$ ）のうち、自由記述内容から「自我体験体験群（以後『体験群』と表記）」、「自我体験あいまい群（以後『あいまい群』と表記）」に分類された者計704名を分析対象とした。この分析対象者は天谷（2011a）において分析対象とした者と同じ対象者の一部である。内訳は「体験群」が400名、「あいまい群」が304名であった。
2. 分析対象となる自我体験に関する質問項目：天谷（2005）による自我体験尺度15項目（5件法）であった。項目内容はTable 1に記載した。なお自我体験尺度は天谷（2011b）により、因子分析の結果、一因子性が高いことが明らかとなっており、下位因子に分かれていない。この15項目に対して「思ったことがある」（4）、「近いことを思ったことがある」（3）、「何となくあったような気がする」（2）、「思ったことがない」（1）、「わからない」（0）のうち一つを選ぶよう求め、1項目以上「思ったことがある」、「近いことを思ったことがある」、「何となくあったような気がする」のいずれかを選択した被調査者に対して、その具体的内容を自由記述にて求めた。
3. 自我体験を経験したか否かの判定基準：各被調査者の自我体験に関する質問項目の評定と自由記述内容の質的分析から、全ての被調査者の記述が自我体験とみなせるかどうかを判定した。詳細の手続きは天谷（2004）・天谷（2005）における分析にて明らかとなっている。なお本分析対象者全体を群に分けた後、自我体験尺度得点（15項目の得点の合計点）について一要因分散分析を行った結果、主効果が見られ、Tukey法による多重比較の結果、全ての群間に有意差が見られた（天谷，2011b）。

Table1 自我体験尺度の項目

1	自分はどこから来たのだろうか？
2	自分はどこへ行くのだろうか？
3	自分は何だろうか？
4	自分は誰だろうか？
5	一体何をもって「自分」としているのだろうか？
6	自分の正体って何だろうか？
7	自分の存在そのものが不思議だ。
8	自分は本当に自分か？
9	自分はなぜ自分なのだろうか？
10	だれでもなく、どうして自分なのだろうか？
11	自分が自分であることが不思議だ。
12	なぜ私はこの体を選んだのか？
13	私が私としてでなく、他のだれかとして生まれたという こともあっていいのに、どうして私となっているのだろうか？
14	いろんな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろうか？
15	自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、たまたま 日本の、この時代に生まれたのか？

<結果と考察>

1. 項目別の群間比較

項目別に「体験群」と「あいまい群」の間で t 検定を行った。その結果、項目2と項目8以外の13項目については全て有意差が見られた。いずれも「体験群」の方が「あいまい群」よりも有意に高い結果となった。また有意差が見られなかった項目2や項目8についても、「体験群」の平均値が「あいまい群」の平均値を下回る傾向は見出されなかった。各項目の t 値と有意水準については本文中に記載すると煩雑になるため、Table 2にのみ記載した。

Table2 項目別 t 検定結果

	体験群		あいまい群		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
項目1	2.50	(1.30)	2.25	(1.28)	2.49 *
項目2	3.05	(1.10)	2.89	(1.16)	1.86
項目3	3.31	(0.97)	3.00	(1.13)	3.78 ***
項目4	2.80	(1.23)	2.53	(1.26)	2.86 **
項目5	2.72	(1.25)	2.48	(1.28)	2.54 *
項目6	2.61	(1.22)	2.27	(1.25)	3.63 ***
項目7	2.78	(1.22)	2.49	(1.26)	3.10 **
項目8	2.54	(1.31)	2.35	(1.30)	1.56
項目9	2.72	(1.25)	2.40	(1.26)	3.33 **
項目10	2.51	(1.27)	2.20	(1.25)	3.16 **
項目11	2.47	(1.27)	2.22	(1.29)	2.54 *
項目12	2.07	(1.27)	1.78	(1.24)	3.06 **
項目13	2.43	(1.22)	2.14	(1.17)	3.21 **
項目14	2.40	(1.26)	2.13	(1.25)	2.88 *
項目15	2.75	(1.24)	2.50	(1.29)	2.62 **

注.自由度は全て702である。

この分析結果により、項目ごとの得点からも、自由記述により分類された「体験群」と「あいまい群」の間の差異がおおむね統計的に検証されたとと言える。さらに項目ごとの t 値を見てみると、項目3（「自分は何だろう？」）が一番大きく、ついで項目6（「自分の正体って何だろう？」）が大きいことが伺える。これらの項目は、自由記述内容が詳細な人と不十分またははっきりしていない人の間で、項目得点による識別に優れている項目、つまり自我体験の検出に大きく貢献している項目であると言える。

2. 「体験群」と「あいまい群」における自我体験尺度得点の推移

「体験群」と「あいまい群」の2群に関して、自我体験尺度の15項目の各項目得点における差のありように関する検定を行うため、「群」(2)×「項目」(15)の被験者間・被験者内の2要因分散分析を行った。その結果 (Table 3)、「群」に関する主効果と「項目」に関する主効果は有意であったが (順に $F(1, 687) = 17.34, p < .001, F(14, 9618) = 66.02, p < .001$)、「群」と「項目」の交互作用は有意ではなかった ($F(14, 9618) = .50, n. s.$)。分散分析表はTable 3、「群」別の項目得点を図示したものをFigure 1に示した。「群」に関しては「体験群」が「あいまい群」よりも高いことが示された。

	SS	df	MS	F
群	181.45	1	181.45	17.34 ***
誤差	7190.22	687	10.47	
項目	818.77	14	58.48	66.02 ***
群×項目	6.18	14	.44	.50
誤差	8520.75	9618	.89	
全体	16717.37	10334		

注***: $p < .001$

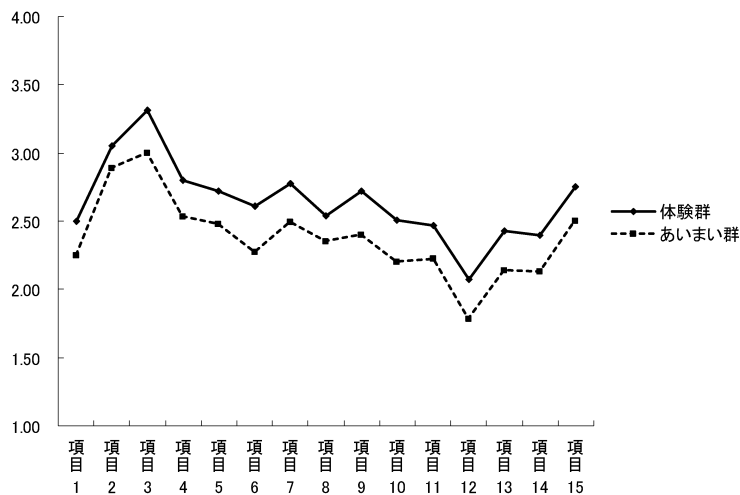


Figure 1. 各項目ごとの群別得点プロット

「項目」に関する主効果に関して、Tukey法による多重比較を行った。その詳細は本稿では省くが（詳細に示すことは本研究の目的とは異なるため）、全ての項目の中で有意に最も高かったものは項目2（「自分はどこへ行くのだろうか？」）であり、次に項目3（「自分は何だろうか？」）であった（項目2と項目3の間にも有意差がある（すべて $p < .05$ ）。さらに全ての項目の中で有意に最も低かったものは項目12（「なぜ私はこの体を選んだのか？」）であった。

この分析において、「群」と「項目」の交互作用が見られなかったことから、自我体験尺度の15項目において、「体験群」と「あいまい群」間の差の大きさ（関係）が異なる項目は見られないということが示された。これにより、「体験群」は「あいまい群」よりもほぼ一貫して高く、自我体験尺度の各項目が、自由記述による分類結果と各項目得点レベルで適切に対応していると言える。

3. 「体験群」のみにおける各項目得点の高さの比較

「体験群」のみにおける各項目得点の高さの比較を行うため、各項目得点に関して繰り返しのある1要因分散分析を行った。その結果、主効果が有意となった（ $F(14, 5460) = 36.82$, $p < .001$ ）。Tukey法による多重比較を行ったが、結果は本文中ではなくTable 4に示す。Table 4から、項目3（「自分は何だろうか？」）が全ての項目の中で有意に最も高い得点であること、項目2（「自分はどこへ行くのだろうか？」）が項目3に次いで（2番目に有意に）高い得点であることが示された。また項目12（「なぜ私はこの体を選んだのか？」）が全ての項目の中で有意に最も低い得点であることが見出された。

「体験群」と「あいまい群」の2群を使用した項目得点の分散分析結果における項目得点の多重比較結果と比較してみると、項目2、項目3、項目4、項目11、項目12、項目13が同じ大小関係を示していた。またそれ以外の項目についても、1項目あたり1～3項目において有意差が見出されない項目が見られる程度であり、大小関係の構造は2者間でそれほど異なる結果となった。

Table4 体験群のみにおける項目得点の分散分析多重比較結果(p<.05)

12 <	1 <	2,3,4,7	
1,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15 <	2 <	3	
1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15 <	3		
1,6,8,10,11,12,13,14 <	4 <	2,3	
10,11,12,13,14 <	5 <	2,3	
12 <	6 <	2,3,4	
1,8,10,11,12,13,14 <	7 <	2,3	
12 <	8 <	2,3,4,7	
10,11,12,13,14 <	9 <	2,3	
12 <	10 <	2,3,4,5,7,9	
12 <	11 <	2,3,4,5,7,9,15	
	12 <	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15	
	12 <	13 <	2,3,4,5,7,9,15
	12 <	14 <	2,3,4,5,7,9,15
	11,12,13,14 <	15 <	2,3

注:数字は全て項目番号である

この分析により、「体験群」のみにおいては、項目3や項目2が自我体験尺度の中で相対的に高い点が得られがちであり、項目12が相対的に低い点が得られがちであることが示された。

<総合考察>

1. 自由記述による判定結果と自我体験尺度得点の相違との対応

本研究の結果、自由記述内容により分類された「体験群」・「あいまい群」の2群間の差について、自我体験尺度における15項目の各項目得点が、2項目以外は「体験群」の方が「あいまい群」よりも有意に高いことが示された。この結果は、自我体験尺度の各項目得点の高さが、自我体験を経ているか否かについての質的分類の結果と適切に対応していることを示唆している。なお、「体験群」と「あいまい群」の間に有意差が見出されなかった項目（項目2「自分はどこへ行くのだろうか?」、項目8「自分は本当に自分か?」）についても、平均値のみを見てみると、「体験群」の方が「あいまい群」よりも高く、「体験群」が「あいまい群」よりも下回ることにはなかった。したがって、この2項目が全体の傾向とは異なる振る舞いをしているわけではないと考えられる。他の13項目に関しては、自由記述による判定により分類された2群間で項目得点の差異が見られたことから、自由記述による判定が揺らいで妥当ではないというよりは、自我体験尺度におけるこの2項目の得点について、「体験群」と「あいまい群」間の差異を反映していないと考えられる。この2項目のみの項目得点を使用して、他変数との関連のありようを考察する場合には、その結果を慎重に扱う必要があることが見出された。

また、「体験群」・「あいまい群」の2群別で各項目得点に関する2要因分散分析結果からは、交互作用が見られず、「体験群」と「あいまい群」の間には主効果が見られた。この結果からも自由記述による自我体験の分類と、自我体験尺度における項目レベルの得点が適切に対応していることが示された。項目別の「体験群」と「あいまい群」間の t 検定の結果では、項目2と項目8に群間の差は見られなかったが、2要因分散分析結果からは、交互作用が出現するほどではなく、項目2や項目8における2群間の差の小ささはそれほど問題ではないと言える。以上により、自我体験尺度における得点の高さと、自由記述による自我体験の分類は適切に対応しており、自我体験尺度における各項目得点の高さのみを使用して他変数との関連を量的に検討していくこともおおよそ妥当であることが示された。

2. 項目別の検討

「体験群」において、項目3（「自分は何だろうか?」）や項目2（「自分はどこへ行くのだろうか?」）が、自我体験尺度における15項目の中では相対的に高い点が得られがちであることが示された。しかし「体験群」だけでなく、「あいまい群」も同じようにこの2項目について高い点

が得られがちであることが2要因分散分析結果から示された。これは自我体験を経験しているか否かの鍵となる項目でありながら、自我体験のみならず、自我体験の範囲に含まれない内容の体験についても調査参加者が想起していることが背景にあると考えられる。

今までの天谷の一連の研究の中でよく見られる誤解や不十分さの例として、例えば項目3（「自分は何だろう？」）については、「親や先生に怒られたり、友達に仲間はずれにされたりした際に『このような目に合う）自分は何なんだ？』というように感じた」体験について、やや抽象度の高い表現やメタ認知的な視点から、またそのような経験から芋づる式に「そもそも自分とは？」と考え始めたような経験が書かれている場合が多いように思われる。また項目2（「自分はどこへ行くのだろうか？」）については、長期的な自身の進路や未来について考えるような経験が書かれている場合が多いように思われる。これらの誤解や不十分さの例をできるだけ想起させず、自我体験のみが想起されるような表現の追加を行い、項目内容の抽象度をより下げていく必要がある。しかし、項目3については、「体験群」と「あいまい群」間の差が最も大きな項目でもあり、調査対象者が自我体験を想起するのに最も貢献している項目でもある。この点を重視しながら、項目内容の改変には十分に注意を払いながら進めることが望まれる。

一方で項目12（「なぜ私はこの体を選んだのか？」）は自我体験尺度における15項目の中では相対的に低い点を得られがちであることが示された。この項目は、自我体験尺度における他の項目に比べて突出して低いことがFigure 1からも伺える。この項目は、内容的には天谷（2002）による自我体験の3つの下位側面における「存在への感覚的違和感」に関する項目である。この「存在への感覚的違和感」は他の2下位側面よりも生起頻度としては低いことが天谷（2004）から明らかとなっている。項目12の低さは、自我体験の生起頻度が低いことが原因として考えられる。とはいえ、この項目においても「体験群」と「あいまい群」間で得点差が見られるので、群間の識別に問題はない。この項目を尺度から削除するほど問題のある項目ではないのではないかと考えられる。

<まとめと今後の課題>

本研究では質問紙における自由記述内容に関して、「体験群」と「あいまい群」の2群間で、自我体験尺度の項目得点レベルで相違が見られるかについて検証を行った。その結果、ほぼ2者が適切に対応しており、自由記述内容による質的分類と自我体験尺度の項目得点の関係が、天谷（2011b）による自我体験尺度総得点と同じ傾向にあることが示された。これにより、他変数と自我体験の関連を検討するにあたり、自我体験尺度得点のみを使用しながら進めても、妥当性の観点からは問題がないことが見出された。また項目の表現の改変についても慎重になりつつ一部進めていくべきであることが示唆された。今後の課題として、第1に改変の具体的な方法を考案

することが挙げられる。自我体験尺度の項目は、一連の天谷による面接調査から得られた言語報告を質問項目にし、そのうえでさらにインタビューを行い、質問項目の評定との対応を検討しながら作成されたものである。この方法とは異なる方法を通して、変更内容を考案しつつ、さらに検証している必要がある。

今後の課題の第2として、得られた自由記述内容について、自我体験尺度における各項目内容に合致した内容が書かれているのかといった質的な対応を詳細に検討していく必要がある。本研究は得られた自由記述内容について、単に「自我体験とみなせるか否か」という観点から分類を行ったのみであり、その評定と各項目得点との対応を調べたにとどまった。得られた自由記述内容が、どの項目に依拠して書かれたものかを判定し、その結果とその項目得点との対応を調べることも今後必要となってくるだろう。

<文献>

- 天谷祐子 2004 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い—自我体験—の検討 発達心理学研究, 15, 356-365.
- 天谷祐子 2005 自己意識と自我体験—「私」への「なぜ」という問い—の関連 パーソナリティ研究, 13, 197-207.
- Amaya, Y. 2008 The contribution of “Ego-experience” toward self-acceptance, academic motivation, and attitude toward death. *Society for Research on Adolescence 2008 biennial meeting (poster)*.
- Amaya, Y. 2009a The Contribution of an “Ego-experience” To Attitudes Towards Ambiguity and the Negative Rumination Trait *Society for Research in Child Development 2009 biennial meeting (poster)*.
- 天谷祐子 2009 自我体験と批判的思考の関連 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 138.
- Amaya, Y. 2009b The Contribution of an “Ego-experience”: To Openness-closedness of personality and the cognitive behavioral self monitoring. *XIV European Conference on Developmental Psychology (poster)*.
- Amaya, Y. 2010a Contribution of ego-experience to self-consciousness. *American Psychological Association, 118th Annual Convention (poster)*.
- 天谷祐子 2010b 「私はなぜ私なのか」という問いとレジリエンス・共感性の関連 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1081.
- 天谷祐子 2011a 自我体験の経験時における深刻さと体験後の意味づけに寄与する要因の検討—初発時期と体験期間を切り口にして— 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』, 14, 25-35.
- 天谷祐子 2011b 私はなぜ私なのか—自我体験の発達心理学 ナカニシヤ出版